

想 がままに

挫折した「市民革命」——箕面市長選の敗北

本誌編集委員 小寺山 康雄

八月二十四日投開票の大阪府箕面市長選で二期目をめざした盟友藤沢純一が敗れた。得票率は藤沢32・8%に對して、自公国民新党推薦の倉田

46・6%、共産党推薦の小林20・6%であった。ぼくは告示の前日から開票の翌日まで九泊十日応援に行つたが、何とも悔しい結果であつた。

異議あり密室談合市政

一九六〇年の市政施行後四〇年間、箕面市政は大中小地権者の意を体した利権屋、市上層部によって牛耳られ、市長職は彼らの間でたらいまわしされ

てきた。これに對して共産党すら対立候補を立てたのはわずか二回にすぎず、正面から對峙したとはとてもいえない闘いぶりであつた。

こうした状況に敢然と異議申し立てをしたのが藤沢純一であつた。藤沢は環境保護、街づくり、高齢者をテーマにした三つの市民運動を立ち上げ、九二年、市議選に挑戦し上位当選した。九六年には市民運動の仲間である女性二人を擁立し、自身は箕面市議選始まつて以来の高得票でトップ当選した。そして二〇〇〇年市長選に打つて出て、惜しくも千票差で敗れるが、二〇

〇四年には逆に千票差で現職に勝つたのである。あわせて市民派市議候補五人を擁立し、全員当選（議席占有率20%）という快挙をなした。けた。

藤沢の真骨頂は徹底した情報公開にある。市民マラソンにエントリーされるほど健脚の持主である藤沢は、山あり谷ありの箕面の街を走り回つて、市議会でもみたこと、聞いたこと、知つたことを市民に『ニュース』で逐一報告した。市民派の議員は大なり小なり情報公開に熱心だが、藤沢の『ニュース』の発行頻度と配布枚数はその中でも群を抜いている。市長になつてからもこの

姿勢は変わらず、四年間で一二〇回も地域に出かけ、市政の情報を開し、直接市民の声を聞く機会をつくってきた。

地権者、利権屋、市役所上層部、三位一体の旦那衆が密室で談合し、仕切ってきた箕面市政に憤り、不満を抱き、あるいは諦めてきた市民が藤沢の活動に目を開かされた。『ニュース』の配布を手伝い、事務所を訪れ、選挙の応援に駆けつける市民が引きもきらなくなるのである。今回の市長選でも、事務所に手伝いに来る人だけでも毎日五〇人近くは居ただろう。有給休暇をとり、あるいは家事の合い間に、あるいはパートの仕事を削ったりして駆けつける市民の姿に、ぼくは感動した。

国に助けを求めた自公民

二〇〇四年藤沢市政が誕生したとき、ぼくはミニコミ紙誌に寄稿し「市民革命始まる」と書いた。大仰と思われるだろうが、当選したときの事務所

の雰囲気伝えるにびつたり表現だったと今でも思っている。

旦那衆、自公民は慌てふためいた。空席の収入役を全国公募し、元銀行員を提案すると、職員でないからと反対した。しからばと助役に職員を提案すると、役所批判をする市長が職員を登用するのは認められない、息子がいきなり外国人の嫁を連れてきたようなもの、言語明瞭・意味不明の理由で反対した。反対の急先鋒に立ったこの自公民議員は、男女協働参画条例に「このような行き過ぎた条例は、人類の滅亡につながる」と、喚きちらした。教育委員の補充提案には「市長が悪いから反対」と、ついに本音を吐いた。

三十人学級に、あろうことか教師出身の民主党議員が反対した。後期高齢者医療制度の廃止意見書を市議会で決議しようとする、国会では廃止派のはずの民主党議員は自公とともに反対した。タバコやゴミのポイ捨て禁止条

例、交通弱者の足を確保するためのコミュニティバスの運行にも、自公民はこぞって反対した。なんとしても藤沢に実績を挙げさせたくなかったのだ。彼らの目線は市民ではなく、終始一貫自分たちの党派の利害に向けられていた。見下げ果てた徒党の輩である。

こうして藤沢の提案・公約の実現をことごとく潰してきた自公民は、今回の選挙で立候補者三二人中十七人を擁立し、口を揃えて大合唱したのである。「公約を守らない藤沢」と。そしてこれまでのように旦那衆が縄張り争いで分裂したり、たらいまわしでは勝てないと、「賢明」にも気づき、候補者を一本に絞り、藤沢の前の市長時代に総務省から出向していた静岡選出の自民党国会議員の息子であるキャリア官僚を担いだのである。つまり国家に救いを求めたのだ。そのうえ、買春ツアーをODA（政府開発援助）の一種であるとか、人権なんてクソ喰らえなど、

数々の暴言を吐くことでテレビタレントになり、職員の働きぶりを隠し撮りまでして監視し、教育の独立性を侵害し、市民運動を罵倒するネオ・ファシスト橋下大阪府知事の応援を求めた。倉田の勝利は、たしかに旦那衆にとっては勝利であろう。しかし民主党、「連合」、自治労、教組にとつては敗北以外のなにものでもない。彼らはそのことに気づいてもないのである。

箕面市民よ 巻き返せ

前回市長選と比べると、倉田は二人に分裂した保守票を合算した得票より少なく、藤沢と小林票を合わせると、それを上回り、しかも前回より増えている。旧弊を打破し現状を変革しようとする市民意識は、依然として健在であるといえよう。

しかし、藤沢自身はわずかとはいえず、前回より得票を減らしている。そして小林票は前回の共産党候補より

43%も伸張している。このことは何を意味するか？

藤沢に期待しながら、期待を裏切られたと考える市民が少なからず存在し、この人たちは棄権するか、共産党に投票したといえるのではないか。

藤沢は住基ネットからの離脱を求める市民の側に立ち、無防備都市宣言を提唱し、大型開発を止め、三十人学級を実現しようとした。人権・反戦平和・環境保護・公教育の充実のために奮闘した。しかしそれらが議会多数派によつてことごとく潰されたとき、議会の力関係に惑わされ、市民の目には後退としか映らない妥協に走ってしまったのではないかと、ぼくは思う。

五人もいる市民派市議。必要とあらば仕事を休み家事を放棄しても駆けつける少なからぬ数の強力な市民。彼女らとスクラムを組んで議会と市役所を飛び出し、街に出て直接市民に訴える。三十人学級の是非を教職員と保

護者に直接アンケートで問いかける。住民投票を提起し、議会がそれをも否決すれば、リコール運動をおこなう。市民のための、市政から市民による、市政へと大胆に転換すること。すなわち間接民主主義の壁を直接民主主義でぶち破る市民運動の展開。

あるいは市職員の賃金削減という前に、総人件費は減らしても非正規など差別的処遇を改善することも、弱者の側に立ち、人権を守る市民派市長としてはやるべきことではなかったか。

ずいぶん好き勝手なことを書いてしまった。本当は「ご苦労さん。ゆっくり休んでくれ」といいたいが、予想される市民派市議、市民運動に対する反動を前にして、藤沢にはもうひとふんばりしてほしいと願う。おそらく多くの市民もそう願っているだろう。

今必要なことは敗因を徹底して議論し議論を通して箕面の市民運動の次のステップを踏み出すことである。